

科目名		構音障害Ⅰ			授業の種類	演習	講師名		
授業回数	30回	時間数	60時間	(2単位)	配当学年・時期	言語聴覚士科2年		必修・選択	必修
〔授業の目的・ねらい〕									
口唇口蓋裂の評価・治療のみならず、地域連携について学生の技術・関心を拡大させる。									
〔授業全体の内容の概要〕									
器質性構音障害のうち、おもに口唇口蓋裂について学ぶ。									
〔講師の実務経験〕									
〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕									
口蓋裂術後言語障害について講義する。国家試験出題基準に沿った基礎的な知識の習得。音声学、音韻、構音、口腔外科などの隣接する専門領域との複合的なつながりを理解する。視聴覚教材を用いて臨床の実際を知る 小テストの実施									
回数	講義内容								
1	器質性構音障害を理解するために 構音障害の概念について								
2	構音・音韻発達・構音障害のメカニズム 検査と評価、音声学的側面（スライドの供覧）								
3	口蓋裂の言語臨床に必要な基礎知識								
4	口蓋裂言語とは								
5	口蓋裂術後言語障害①構音器官の形態と機能評価								
6	〃 ②構音・声の質などの評価法								
7	〃 ③言語管理の内容理解と構音訓練の実際								
8	乳児期の言語臨床について								
9	幼児期・児童期の言語臨床について								
10	思春期・成人期の言語臨床について								
11	特別な問題をもつ（症候群に存する）症例について								
12	異常構音（6種類）についての解説								
13	〃 の音声聴取の実習、系統的構音訓練について								
14	舌・口唇の形態異常と機能障害								
15	まとめ								
16	口腔・中咽頭がんの基礎知識の理解								
17	歯科・口腔外科学、音声学などの関連領域の理解を深める								
18	口腔がんと中咽頭がんの特性と治療								
19	頸部の構造と機能								
20	口腔・中咽頭がんの診断と治療								
21	リハビリテーションの進め方								
22	構音障害のリハビリテーション								
23	補助診断と機能訓練								
24	歯科補綴的アプローチ								
25	摂食・嚥下障害のリハビリテーション								
26	口腔・咽頭期（摂食・嚥下）の機能訓練								
27	リハビリテーションの実際								
28	リハ処方の実例 : 症例についての理解、評価・処方（目標の設定）をまとめレポートの作成								
29	手術的介入について								
30	まとめ								
【 準備学習・時間外学習 】									
【 使用テキスト 】									
書籍名					著者名		出版社		
なし・配布プリント									
【 単位認定の方法及び基準（試験やレポート評価基準など） 】									
試験の結果を100点満点として成績を評価する。試験は定期試験のみ実施とし、60点以上の場合に科目を認定する。									